

## 旅立ちの季節

(五十年前、一九七三年七月十八日、水 東京・羽田～)

「じゃあ、気を付けて！ 戻って来るまでは、道中の心配は全部なくなってるのか、生きてるのか死んでるのかも全然分らないんだから」

と、羽田を発つときには、友人二人からの見送りを受けながら、初の海外への一人旅は、これから先には何が待っていることだろうかとの期待感と同時に、往復の航空チケットと欧州でのユーレイルパスを除いては、ほぼ無銭旅行に近い様な貧乏旅行なので、一抹の不安感と云うのも多少なりは入り混じっていた様なものだろうか。

朝、八時三十分発の搭乗機はアンカレッジ、ロンドン経由の北回りパリ・オルリー空港行の日航ジャンボ機、ボーイング747。

羽田を発つと、六時間余りで、前日付付二時過ぎのアンカレッジ空港に經由着陸。

約二時間後にアンカレッジを発った後には北極上空を経由し、上空の通過時にはアナウンスが流れ、「北極通過証明書」なるものも戴いた。

いきなり、昼間から夕方に、夕方から深夜に。そして、また朝に、と、目まぐるしく昼夜が入れ替わる様な中でも、目が覚める度に、何度も機内食サービスにあり付ける様な気がしての幸せ感もあった。

(七月十八日、水 ロンドン初日)

羽田を発ってから約一六時間余りでの同日夕刻一六時前のロンドン・ヒースロー空港に到着した。同じ日付での羽田とロンドンであり、七月十八日を二度迎えたと言うのか、過ごした様な感覚であった。

今回旅行での航空券はパリ・オルリー空港の往復だったのだが、この旅行期間中には一週間のイギリス・ウィズビーチでの農場キャンプへの参加予定が含まれていたものであり、当経由地ロンドンに着陸した際に日程を確認したところ、四日後にロンドンからの送迎バスを利用とのことだったのでも、この際、パリまでの無駄な往復を避けて、急遽、ロンドンで降りて、あちこちの市内観光をしながら時間潰しをするつもりだった。

他にも女性二人と男性四人の日本人若者客が同時に降りたが、折からの夕刻時間帯であり、皆さん、共に初めての国外到着でもあったので、以降はそれぞれ別の道なれど、取りあえずの同夜については、皆で当地のセンター・エアポート・ホテルに宿泊しようという話でまとめた。

(七月十九日、木 ロンドン二日目)



夕方には、やはり、ユースを捜し歩いて、ケンジントンの目当てのユースにたどり着いたのだが、ベッドが空いてないとのことなので泊を断られ、そこから徒歩で十五〜二十分位の他のユースを紹介された。

ロバ、この際の特典とでも云えるのか、たまたま、二人連れのドイツ人女性も同タイミングだったので、(内心、ウキウキした気分ながら)「じゃあ、一緒に向かいましょう」という話しになった。

だが、世の中は、そんなに良い話と云うのは、そう長くは続かないようだ。

直後には、ドイツ人、デンマーク人、スウェーデン人の四人の男性グループが、やはり、同様に宿泊を断られ、結局は同じユースを案内されたので、共に向かうことになったものだった。😞  
辿り着いた宿泊先はメイディホステル。朝食付き一ポンド丁度だった。

( 七月二十一日、土曜日 ) ( ロンドン四日目 )

午前八時半に起床。

ケンジントンガーデンズ、ウエストミンスター寺院、ピクトリアパーク、ビッグベン、ジエームズパーク、トラファルガー広場、ピカデリーサーカス…等を散策見学。

夜には、日本を出発前からの唯一の宿泊予約として含まれていた筈のプリンス・スクエアホテル着いたのだが、どうやら、代理店(学生支援機構)側での不手際があった模様で、予約の話が通じていなかった。😞(一ポンド二〇ペンスを支払う羽目になったのは貧乏旅行者にとっては大変な痛手だった。(その分の料金は既に支払い済みだった筈のことなのに…))

代理店側のロンドン事務所側とは何度も電話でのやり取りをしたものの、事務所としての開設が来月からになるとのことと、全く機能不全な段階故でのトラブルではあった。

何かと割り切れない様な不愉快なことではあったが、ともあれ、翌日には午後のバスに乗り、ウイブビーチの農場キャンプへ向かう予定である。

果たして、明日からは、どういふ所での、どんな生活が待っていることだろうかとの妄想を巡りしながらベッドに着いた。

